

仕 様 書

以下に委託業務の仕様を定める。

事 業 名：日本遺産「星降る中部高地の縄文世界」魅力発信推進事業

委 託 名：「星降る中部高地の縄文世界」周遊型体験ゲーム企画・作成業務委託

発 注 者：甲信縄文文化発信・活性化協議会 会長 尾島信久

履行期間：契約日より令和3年3月26日まで

業務内容：

日本遺産「星降る中部高地の縄文世界」ストーリー及び構成する文化遺産（以下「縄文文化遺産」という。）を活用して、日本遺産に認定された長野県および山梨県の地域（以下「認定地域」という。）の観光振興とPRを図るために、受託者は以下の業務を行うものとする。

◆目的

- 1) 日本遺産「星降る中部高地」のストーリーを、楽しみながら一体的に理解できる周遊型体験ゲームを企画・制作する。この周遊型体験ゲームには、参加者が疑似的に周遊するものを含むものとするが、その場合にも、ゲーム中やゲーム後に認定地域を実際に周遊する仕組みを設けることとする。
- 2) 日本遺産「星降る中部高地」のストーリーを構成する縄文の世界を疑似体験できるものとする。
- 3) 日本遺産「星降る中部高地」の認定地域における自然や観光資源の魅力に気付かせ、幅の広い地域資源の活用を促すものとする。

◆対象

歴史ファンに加え、遺跡や縄文時代の魅力に触れる機会の少なかったファミリー・若年層などの幅広い層が関心を持ち、参加しやすい内容とする。

◆方法

- 1) 各構成機関が参加者に提供しやすい仕組みとする。
- 2) ゲームの内容と共に、日本遺産「星降る中部高地」のストーリーを構成する縄文の世界やその背景となる地域の自然環境がイメージしやすいデザインとする。
- 3) ゲームはどの場所においても気軽に参加できるが、認定地域及び博物館等（別紙1・2）への周遊や、それぞれが既に取り組んでいる各種の体験への参加を促すものとする。なお、各構成機関と協議し、必要に応じて新たな体験メニューを受託者が提案する。
- 4) 地域住民の理解・協力の上に取り組む内容として、既存の観光資源をはじめとした多様な地域資源を活用する手法を組み込む。
- 5) ゲーム内容の作成に当たっては別紙を参照し、発注者及び構成機関の関係者に聞き取りを行い、時代考証や構成地域の独自性を尊重しながらも自由な発想で提案する。
- 6) ゲームを通じて地域に波及・還元できるような仕組みを提案する。
（例）地域の商店で買い物をする 等

7) 次年度以降の経費が極力発生しないものとする。発生する場合は経費を積算して示すこと。

◆運用と展開

- 1) 国内外の参加者を念頭とした工夫を提案する。
- 2) 運用にあたって「新しい生活様式」に則した対策等を配慮した工夫を提案する。
- 3) 継続的に活用できるゲームとし、今後の運用や展開方法について具体的に提案する。

留意事項：

- 1) 本業務委託により制作される成果物の著作権（著作権法第27条・第28条に規定する権利を含む）、所有権等、その他の一切の権利は委託者に帰属するものとする。ただし、受託者が従来から権利を有していた受託者固有の知識、技術に関する権利等（以下、「権利留保分」という。）については、受託者に留保するものとし、この場合、委託者は、権利留保分についての当該権利を非独占的に使用できるものとする。
- 2) 成果物は委託者が自由に二次使用（印刷物の制作、ホームページへの掲載等）できるものとし、成果物の二次使用に関して、委託者にいかなる制限も課さないものとする。
- 3) 使用する写真素材等については、インターネット上でも発信することから、著作権等（肖像権含む）に十分配慮し、二次的著作物に関する権利も譲渡の対象とし、二次利用が可能なものとする。
- 4) 遺跡を周遊の対象にする場合は、遺跡及び周辺の景観の保護・保存に留意すること。

その他：

- 1) 日本遺産「星降る中部高地の縄文世界」のストーリーに関連する遺跡（国の史跡：縄文時代のムラなどを復元した遺跡）は別表1、関連する土器や石器などの構成文化財展示施設は別表2に示す。
- 2) 日本遺産「星降る中部高地の縄文世界」のストーリーに関連する参考資料として、別紙1、及び参考資料を提供する。

納入成果品：

- 1) 委託業務成果 20式
- 2) 電子データを記録したCD-R（正・副） 2部
- 3) 打合せ資料・関係機関等協議資料 2部
- 4) 今後実施可能なイベント開催案（手法や経費等） 2部
- 5) その他事務局が指示するもの

納入場所：山梨県甲府市丸ノ内1-6-1 山梨県観光文化部文化振興・文化財課内
甲信縄文文化発信・活性化協議会事務局

別表1 縄文文化遺産（史跡）一覧

	名 称	所在地	備考
1	史跡梨久保遺跡	長野県岡谷市	国史跡
2	史跡尖石遺跡	長野県茅野市	国史跡
3	史跡与助尾根遺跡	長野県茅野市	国史跡
4	史跡駒形遺跡	長野県茅野市	国史跡
5	史跡大深山遺跡	長野県川上村	国史跡
6	史跡井戸尻遺跡	長野県富士見町	国史跡
7	史跡阿久遺跡	長野県原村	国史跡
8	史跡星糞峠黒曜石原産地遺跡	長野県長和町	国史跡
9	史跡星ヶ塔黒曜石原産地遺跡	長野県下諏訪町	国史跡
10	史跡梅之木遺跡	山梨県北杜市	国史跡
11	史跡金生遺跡	山梨県北杜市	国史跡

別表2 縄文文化遺産展示施設一覧

	名 称	所在地	備考
1	市立岡谷美術考古館	長野県岡谷市	
2	諏訪市博物館	長野県諏訪市	
3	茅野市尖石縄文考古館	長野県茅野市	
4	川上村文化センター	長野県川上村	
5	井戸尻考古館	長野県富士見町	
6	八ヶ岳美術館	長野県原村	
7	星くずの里たかやま黒曜石体験ミュージアム	長野県長和町	
8	長和町原始・古代ロマン体験館	長野県長和町	
9	星ヶ塔ミュージアム矢の根や	長野県下諏訪町	
10	山梨県立考古博物館	山梨県甲府市	
11	山梨県立博物館	山梨県笛吹市	
12	釈迦堂遺跡博物館	山梨県笛吹市	
13	春日居郷土館	山梨県笛吹市	
14	甲府市藤村記念館	山梨県甲府市	
15	南アルプス市ふるさと文化伝承館	山梨県南アルプス市	
16	北杜市考古資料館	山梨県北杜市	
17	韮崎市民俗資料館	山梨県韮崎市	

◆日本遺産申請タイトル

星降る中部高地の縄文世界

—数千年を遡(さかのぼ)る黒曜石鉾山と縄文人に出会う旅—

◆ストーリーの概要

日本の真ん中、八ヶ岳を中心とした中部高地には、ほかでは見られない縄文時代の黒曜石鉾山がある。鉾山の森に足を踏み入ると、そこには縄文人が掘り出したキラキラ耀(かがや)く黒曜石のカケラが一面に散らばり、星降る里として言い伝えられてきた。日本最古のブランド「黒曜石」は、最高級の矢じりの材料として日本に各地にもたらされた。

麓のムラで作られたヒトや森に生きる動物を描いた土器やヴィーナス土偶を見ると、縄文人の高い芸術性に驚かされ、黒曜石や山の幸に恵まれて繁栄した縄文人を身近に感じることができる。

◆ストーリーの全体像

黒く耀^{かがや}く石の魅力

精緻で多様な形の道具を作り出す日本列島のものづくりの文化は、大陸から渡って来た人類が約3万数千年前に信州産の黒曜石と出会ったことがそのルーツとなる。

黒曜石は火山が生みだした天然ガラスである。割れ口が鋭く加工しやすいため、矢じりやナイフなどの原料として広く使われていた。今日のような運送手段がなかった昔、数万年にわたって産地限定の黒曜石が大量に、しかも広域に流通していた事実は、この資源が日本最古のブランドとして人気が高かったことを物語っている。



星麓産の黒曜石原石

黒曜石縄文鉾山から全国へ

中部高地の深い森の頂には、縄文人が数千年にわたって黒曜石を掘り続けた国内唯一の黒曜石鉾山がある。霧ヶ峰高原の一画にある星麓(ほしくそ) 麓の黒曜石鉾山を訪れると、数千年の時を経た今でも縄文人が黒曜石を掘り出していた痕跡を、環状にめぐる土手の中央部にクレーター状の窪みとして目にすることができる。不思議なこの地形は、採掘坑(さいくつこう)の周囲に掘り捨てた土砂が積み重ねられてできたものである。縄文人が掘り出した土砂の厚みは優に5mを超え、地下では3,500年前に構築された土砂崩れを防ぐための木柵がそのままに発見された。より良い石材を獲得しようとした縄文人の苦勞と熱い思いが伝わってくる。

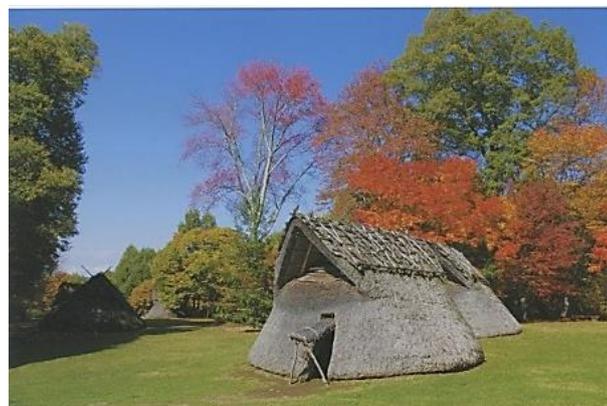
国内でも希少な黒曜石鉾山は、星麓、星ヶ塔など星の名がつく高原地帯で発見されている。標高1500mを超えるこれらの場所には、キラキラ光る黒曜石のかけらがたくさん散らばっている。我々の祖先は夜空に瞬く無数の星を見上げ、黒曜石のかけらを大地に降り積もった星のかけらと信じてこうした地名が生まれた。麓から見上げる満天の夜空の耀きは、数千年を経た今も変わらぬ耀きを足元に投じている。

鉾山から掘り出された耀く黒曜石は、山裾のムラからムラへと持ち運ばれ、ムラを結ぶ道は「黒曜石の道」となった。八ヶ岳山麓には、大量の黒曜石が集められた大きなムラが点々と存在する。そこは良質な信州産の黒曜石を求めて遠くの地域から訪れる縄文人との出会いの場となり、東西文化の交流ネットワークが結ばれたのである。

恵み多き八ヶ岳山麓の縄文ムラへ

高原地帯から山麓に広がる台地へと、中部高地の縄文人は標高差 1,000m に及ぶ多様な環境を活動の舞台としていた。今からおよそ 5,000 年前、日本で最大のムラ数を誇るに至った縄文時代中期の山麓文化は、その資源環境を活かす術によって開花したものである。

縄文鉾山から落葉広葉樹の深い森を通り麓のムラをめざす。ムラに近づくと明るい雑木林に変化する。縄文時代のムラの姿を守り伝える長野県の尖石(とがり



尖石遺跡の縄文ムラ

いし) 遺跡では、竪穴住居が立ち並び、当時の風景が私たちを迎えてくれる。ムラの周囲には、食糧や建築材、そして燃料としても最適であったクリなどが育てられていた。実を付けない木は伐採され、食を支えたドングリやクルミなどの大きな実をつける木が選ばれていた。広大な森林の懐には、家族が集い、遠方からの旅人を迎えたムラが数多く営まれていたのである。農耕民族と言われる日本人がつくりだした田園風景のルーツは、米づくりを始めた弥生時代にその風景を求めることもできる。しかし、それよりもはるか数千年～数万年前には違った風景が広がっていた。我々の記憶の奥にしまい込んでしまった真の日本のルーツとなる森や山に囲まれた風景である。中部高地の一带では、今に残る豊かな自然と遺跡の姿から懐かしいその風景を臨むことができる。集落を包む森を抜け、山麓を刻む清らかな水を集めた大きな川のほとりに立つと、森の背後には空に向かって立ち並ぶ八ヶ岳や南アルプスなど雄大な山並みが見え、四季折々の自然の営みがパノラマのように展開する。

標高の高い山麓地帯の春は雪解けとともに里から山へと訪れ、ワラビやコゴミなどの新鮮な山菜が一斉に顔をだす。そして、深い緑に包まれた山並みが里へと吹き抜ける風と共に鮮やかな秋の紅葉へと姿を変える頃、山ブドウやドングリの結実とキノコの便りを目にすることができる。縄文人たちも、この景色の移ろいの中に恵みの到来と地の利を知り、再び訪れる厳しくも静かな冬を乗り切る貯えの知恵を培ったのである。今に伝わる多種多様な食材とその文化は、数千年の昔より雄大な自然と向き合う伝統から生み出された。

中部高地の玄関口となる山梨県の梅之木遺跡のムラからは、幾重にも連なる山並みを間じかで見渡すことができる。関東の平野から、遠き山並みを目指して足を運んだ縄文人たちも、この地に立ち、奥深い山麓の恵みに胸を高鳴らせたに違いない。

森に集う縄文人に会いに行こう

土器に水の流れ、森に育つ草木、そしてその世界に生きていた人や動物の姿を立体的に描く、国内外でも類例のない土器文化が発達した。それは縄文芸術の極みでもある。

器の中を覗き込むように母の顔をつけた土器は、中身が煮えるのを楽しみに見守っていたのだろうか。家族が囲む土器鍋には、母から生まれようとする子どもの顔や歌を歌い踊るようなヒトの姿も描かれている。森の芸術家縄文人が残した作品は、まるで当時の生活の一コマをそのままに伝えているようだ。土器に映し出された家族の顔や様々な表情を持つ土偶は、数千年の時空を超えて今を見つめている。

縄文人の心に触れる

黒曜石鉾山を開発し、交易ルートを開拓し、クリ林を育てるなどの技術を手にした縄文人だったが、どうしてもないことが起きた時、あるいは日頃の感謝をこめて、カミに“祈る”ことが重要だった。中でも、子どもの誕生と健やかな成長への願いは、私たちがヴィーナスや女神と呼んでいる妊娠女性の姿をした土偶への祈りに託された。長野県中ツ原（なかつばら）遺跡の現地に立つと、役割を終えてムラの中央に埋納された「仮面の女神」を、発掘された瞬間の復元模型でみるができる。また、博物館では、個性的な表情のヴィーナスたちに出会うことができる。

天体の周期に生命の誕生や再生を祈るマツリの事例もある。冬至など特別な日に太陽が山頂に沈む場所に位置する北杜市金生（きんせい）ムラの遺跡では、山頂を臨む位置に祭壇を作るマツリが繰り返し行われていた。マツリの姿は、自然の営みとともに生きる狩猟採集民であった縄文人の純粋な心を伝えている。

日本列島源流文化発見の旅へ

中部高地では、太古から変わらぬ雄大な景観の中、縄文人が黒曜石を運んだ道をたどり山麓の縄文ムラの跡を訪ね、命の躍動を表現した母なるヴィーナスや森に潜む動物をモチーフとする造形に優れた原始芸術に出会い、今につながる縄文人の世界に思いを馳せることができる。胸の奥底にしまい込んだ遠い記憶、自然とともにあった日本文化の源流にタイムスリップしてみよう。



縄文芸術家たちの作品

【参考】ストーリーの背景・組み込みたいイメージの骨子

<歴史背景・環境背景>

- 縄文時代の中部高地（山梨県・長野県諏訪地域を中心とした地域）は、日本の中でもひときわ豊かな広葉樹林帯の森が広がり、標高差のある多くの山々や河川のダイナミックな自然環境を背景として自然とともに共生していました。
- 豊かな自然を背景として1万数千年以上も継続した縄文文化は、現代文明の対極とも言える持続可能な価値観や精神性が生まれ、営まれ続けます。現代人が求めるサステナビリティやスローライフを地で行なっているため、このような要素はぜひ盛り込みたいです。

<食文化>

- 縄文人は土器の発明により、食物の煮炊きが可能となりました。それまで食料とし得なかった動植物資源を有効な食料として活用することに成功し、安定的な食料資源を背景に竪穴住居での定住が可能となりました。
- 豊かな山での狩猟や木の実等の採集、河川や湖での漁労等により食料を獲得していました。
- 狩猟・採集を基礎とした食文化の中では、自然環境の影響を大きく受ける（例えば、木の実は年によって実を多くつける年とそうでない年がある）ことから、季節や地域ごとの特性を生かして様々な食料をバランスよく獲得することで食生活の安定を図ってきました。
- 安定的な食料の確保のために、大豆や小豆などの植物の初期的な栽培活動があったことも分かっています。

<精神文化>

- 自然との共生を行っていた縄文の人々は、自然に対して「畏れ」「祈り」「感謝」しながら上手に暮らしてきた様子がみられます。
- 煮炊きの道具である土器にも個性的で芸術性に富んだ様々な文様を施し、精神文化を表現したことがわかっています。
- 中部高地の縄文土器には、縄文人の顔や蛇やイノシシなどの文様を施したものも数多くみられ、この地域ならではの特徴とされています。人口も多かったとされるこの地域では、縄文土器を単なる煮炊きの道具としてではなく、命を繋ぐ大切な道具として捉えていたのではないのでしょうか。
- 中部高地は「祈り」の象徴ともいえる「土偶」が全国の中でも特に集中しているエリアであり、おなかの大きな土偶も多くあるなど、そこには自然との共生の中での「繁栄」や、「命」といった普遍的なテーマが含まれているように考えられます。これもゲームの中に組み込みたいテーマです。
- 1年（四季）や1日（昼と夜、日の出と日没）についても、遺跡と絡んでくるとともに、現代人の感性や文化にもつながっているようです。縄文のムラでは春分・秋分の日の特徴的な山への日が沈む例があります。縄文人のムラと太陽や月との関係についても意味があることがわかっています。

<流通と交流>

- 中部高地に一大原産地をもつ黒曜石は全国的にみても極めて良質なものであり、狩猟を主な生業としていた縄文人にとって狩りに使う石器づくりの大切な資源として広く全国に流通しました。また、切れ味の鋭い黒曜石は、調理や様々な素材から道具などをつくる加工具としても人気がありました。
- 中部高地は水晶の産地としても知られています。星のカケラと言い伝えられてきた黒曜石とともに、キラキラ輝く貴重な石からつくり出された石器は、切れ味のみならずその美しさにも人気の秘密があったようです。この様な石器の材料の産地には、数万年も昔の旧石器時代に遡る石器づくりの工房跡も残されており、精巧な道具を生み出す伝統的な地域だったようです。
- 中部高地の縄文人たちは、良質な黒曜石や豊かな自然環境を背景に関東をはじめとする周辺地域と頻りに物々交換をしていたようです。中部高地に営まれた縄文時代の拠点的なムラには、海産の魚や貝製品、周辺地域でつくられた多くの土器や石器が持ち込まれており、人や物資の往来が盛んであったことを物語っています。
- 全国でも産地が限定される黒曜石の産地では、縄文時代の黒曜石鉱山が発見されています。発掘調査が続く黒曜石鉱山では、黒曜石の岩脈を掘削した跡や、土砂崩れ防止の木柵も発見されており、苦勞して手に入れた貴重な資源を広い地域のたくさんの人達と仲良く分け合っていた様子が分かってきました。

<現代とのつながり>

- 「縄文」が単に昔のことだけでなく、今にも息づいていることも示唆できたらよいと思っています。ムラでの暮らしやライフサイクルの基礎はすでに縄文時代に出来上がっています。また、土器や漆、革製品に代表されるモノづくりやジビエなどのように現代の文化や産業につながっているものも多く見られます。
- 自然と共生する縄文時代のライフサイクルは、持続可能な生活様式の基本原則として世界から注目されつつあります。その生活の背景にあるダイナミックな自然を俯瞰し、食や温泉など、その恵みを楽しむ生活体験は、縄文時代以来の伝統ともいえます。
- 黒曜石鉱山をめぐる生活資源の流通や縄文のムラで盛んにおこなわれていた祭りの様子は、この地域ならではの個性を持ちながらも、広く地域を越えて人々が繋がっていたことを物語っています。日本列島のほぼ真ん中にある中部高地は、今も昔も東西南北の広域エリアを結ぶ交通の要所にあり、居ながらにして地域を越えた文化交流や人的交流を体感することが出来る地域です。この地での出会いも大きなテーマとなるでしょう。
- また、黒曜石を持ち運んだオブシディアンロードは、高原や遺跡が並ぶ川沿いの道としてその軌跡を追うことができます。人々が移動のルートとして選んだ道筋の多くは、今も昔も重なることが多く、当地域のストーリーとともに縄文人の足跡を辿る周遊ができます。その周遊ルートにおいて、この地域ならではの風景や食の観光スポットを発見する旅も楽しいでしょう。
- 起伏のある雄大な自然環境を一望できる中部高地の景観は、縄文時代から人々が目にしていた季節の移り変わりを迫力のあるパノラマとして今に伝えています。
- 限りなく空に近い中部高地は、数千光年の星の輝きを通して縄文時代と出会える空間を

提供してくれます。空と大地との時空間を結びつける「星降る中部高地の縄文時代」を身近に体感できる地域として、当地における滞在型周遊の大きな魅力の一つになるでしょう。

- 縄文時代は約1万数千年続いた時代です。長い時代のなか、時期や地域によってさまざまな土器を作っていました。それぞれの地域ならではの土器が作られ、同じような土器のまとまりを文化圏として捉えることができます。中部高地の「方言」は、この地域ならではの縄文土器が流行していた文化圏と共通するといわれています。縄文人たちが具体的にどのような言語を話していたかは分かっていませんが、その名残といわれる当地の「方言」を探してみることも一興です。